

「資本論を読む会」便り

No. 42
2019.1.20

12月の第43回例会は、何かと慌ただしい時期でしたが、ほぼフルメンバーの参加があり、机の並べ方をどうしようか、という程でした。いろいろな議論をして、第3章 第1節 価値の尺度 を終わりました。

終了後、ご都合の付く方々と近くの居酒屋で、「延長戦」に入りました。資本論を読もうとしたきっかけとか、この本が参考になるとか、こちらの方も盛会でした。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版。段落は本文の字下げで数える)。

◆第43回

第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第1節 価値の尺度

【第13～17段落の復習】

レポーターは前回の復習から始めました。

●13・14段落

12段落で、金の価値が変動すると価格も変動するが、金の度量標準機能に影響はない、ということを見た後、13・14段落に入って、価格形態の考察に戻ります。ここでは、価格の単位名が金属重量の単位名から分離してくる、いくつかの経緯が説明されていました。

●15段落

貨幣度量標準は慣習的に形成されたが、一般的に妥当性あるものとするために、法律によって規定されるようになりました。貨幣の分割の仕方と名称が変わっても、一定の金属重量が金属貨幣の度量標準であることに変化はありません。

●16段落

商品の価格は、金の度量標準の貨幣名または法律上有効な計算名で表現されます。例えば、3ポンド・スターリング 17シリング 10 $\frac{1}{2}$ ペンス といった具合です。このような表現を可能にする貨幣の機能が計算貨幣です。

●17段落

貨幣名において価値関係の痕跡は消えています。貨幣名の本質についての理解は混乱し、貨幣名は貨幣金属(金)の価値をも表すので、訳の分からないものになっています。(不可思議な可除部分を表す)。他面、価値が貨幣にまで発展するのは必然的です。

議論の中で、貨幣名の中身が分からないので、貨幣の働きについての理解が曖昧になっている。本当は金属重量が基準になっているが、貨幣名は重さから離れてその正体が分かりにくくなっている。と言うのが17段落の言いたいことではないかという意見がありました。

注16に、1トンの鉄も1オンスの金も、3ポンド17シリング10ペンス1/2 と呼ばれる例がでてきます。これに関連して、「金の価格」は矛盾であるという指摘がありました。これがこの段落の理解のポイントかなと思います。というのは、価格は金の分量で表した商品の価値です。しかし金の価値を金で表すことは出来ないから、金の価格は存在しません。にもかかわらず、1オンスの金 = 3ポンド17シリング10ペンス1/2 と呼ばれたりするので、これを「何が何だか分からない物」とか「没概念的」とか言っているのでしょう。

あと、金、紙幣の価値、円、価格は純粋に社会的な形態、などについても議論しました。

【第18段落】 (116) 価格は、商品に対象化されている労働の貨幣名である。…

価値と価格の乖離(=価値の大きさと価格の不一致の可能性)

- (1) 価格は商品に対象化されている労働量の貨幣名。故に商品と貨幣が等価なのは当然。
- (2) しかし、商品と貨幣との交換割合の指標(価格)は、必然的にその商品の価値量の指標である、とはならない。
- (3) 例 社会的必要労働のある分量 = 1クォーターの小麦
= 2ポンド(金約0.5オンス) とする。
 - ・2ポンドは、1クォーターの小麦の価格である。
 - ・事情が、1クォーターの小麦を3ポンドに値上げ、または1ポンドに値下げしても、やはり小麦の価格である。(小麦の価値量の表現としては過大、または過小だが)
 - 理由 ①小麦の価値形態、貨幣である。
 - ②小麦と貨幣との交換割合の指標である。
- (4) 商品の価値量は、社会的労働時間に対するある必然的な、その商品の形成過程に内在する関係を表わしている。
 - 理由: 生産条件あるいは労働の生産力が変わらない限り、1クォーターの小麦の再生産には同じだけの社会的労働時間が必要だから。
- (5) 価値量が価格に転化されるとともに、この必然的な関係は、一商品とその外にある貨幣商品との交換割合として現われる。
- (6) 交換割合は、商品の価値量が表現されうるとともに、一定の事情の下でその商品が手放される場合の価値量以上または以下も表現されうる。
- (7) 価格と価値量との量的な不一致の可能性、または価値量からの価格の偏差の可能性は、価格形態そのもののうちにある。
- (8) 価格形態は、資本主義的生産様式の無政府性の中では「適当な形態」である。

貨幣(金)の量で表した商品の価値が価格ですが、価格は必ずしも価値を表してはいないと言うことです。「逆は必ずしも真ならず」といったところでしょうか。それはともかく、どんな「事情」が価格を変動させるのでしょうか。

売れる、売れない、といったことでしょうか。いずれにしろ、価格は勝手に独り歩きして、交換割合として表れています。といっても、買い手が付きそうにもない高価格になったり、ただになったりすることは、まずありません。

このような変動する交換割合を通じて、その中で、2つの商品の価値が等しいといった、商品と商品の内在的関係が貫かれている、という指摘がありました。

本文にある「平均法則」とは、こういう意味だと思います。

【第19段落】 (117) しかし、価格形態は、価値量と価格との、すなわち…

価格形態の質的矛盾

(1) 価格形態は、

価値を持たないものが価格表現をされる、という矛盾を、
持つことができる。

(貨幣はただ商品の価値形態でしかないにもかかわらず)

例 良心や名誉など労働生産物でないものが価格をもち商品となる。

(2) 他方、人間労働が対象化されていない未開墾地の価格など、ある現実の価値関係またはこれから派生した関係をひそませていることがありうる。

価格形態は質的矛盾を持ちうる、という説明がありました。それは、価値がないにも関わらず、つまり労働生産物ではない物が、価格を持つ、と言うことです。というのは、商品の金による価値表現が価格ですから(だい4段落)。

そのような例の一つとして土地が挙げられていますが、上記(2)のような事情があります。これについては、地代論(資本論第3巻、第6編 超過利潤の地代への転化)で詳しく展開されている、と説明がありました。

【第20段落】 (117) 相対的価値形態一般がそうであるように、価格は、…

流通手段としての貨幣への移行

(1) 価格は、商品(例えば1トンの鉄)の価値を表現する。

一定量の等価物(例えば1オンスの金)が、鉄と直接に交換されうる、ということによって。

- ・ 一般に、相対的価値形態がそうである。
- ・ 鉄が金と直接に交換されうる、ということによってではない。

(2) 商品が交換価値の働きをするためには、

想像されただけの金から現実の金に自己を転化させなければならない。

(3) しかし、現実には鉄であると同時に現実には金であることはできない。

・ 商品に価格を与えるためには、想像された金を商品に等置すれば十分であったが。

(4) 商品がその所有者のために一般的等価物の役を果たそうとするならば、商品は金と取り替えられなければならない。

(2)の本文は「だから、実際に、交換価値の働きをするためには、……」となっています。読み取りにくいですが、「交換価値の働きをする」の主語は「商品」です。

今、商品は価値形態にあります。この段落の例で言うと、

(商品)
1トンの鉄=1オンスの金

ですから、1トンの鉄の交換価値は1オンスの金です。なので、このままでは1トンの鉄は交換

価値ではないはずですが。それで、鉄が金になれば、交換価値の働きができるようになる、ということなのでしょう。というのは、あるゆる商品が価格形態にあるからです。

(4)について。商品(鉄)は一般的等価物ではないですから、その所持者のために一般的等価物の役割を果たすためには、一般的等価物(金)と取り替えられなければならないのは、当然でしょう。ですが、それは簡単に実現できることではない、というのが、ややくどい例で示されています。商品を生産しても必ず売れるとは限らないということです。

それらの例のなかで「原罪」というのがありますが、これは聖書にあるアダムとイヴの物語であるとの説明がありました。

【第21段落】 (118) 価格形態は、貨幣とひきかえに商品を手放すことの…

商品を手放す現場には、貨幣の現物が必要である。

- (1) 価格形態は、貨幣と引き換えに商品を譲渡する可能性と、必然性を含む。
- (2) 他方、金は、すでに交換過程で貨幣として運動しているから、価値尺度として機能する。ゆえに、観念的な価値尺度のうちには堅い貨幣が待ち伏せしているのである。

この段落は、次の第2節 流通手段 への橋渡しになっています。価値尺度としての貨幣は商品と並んでそこに存在する必要はありませんが、商品の譲渡を実現するためには「堅い貨幣」が、つまり流通手段としての貨幣が、商品譲渡の現場に存在しなければなりません。

これで第1節は終わりですが、ここまで「復習」を終えて、編集人にはまだじっくりこない所があります。それは、第4段落での「一商品の金での価値表現…は、その商品の貨幣形態またはその商品の価格である。」という価格の概念規定と、次の2点が整合しないように思われることです。

- 1) 商品の価値が不変でも、その価格は「事情」によって変動すること。
- 2) 価値を持たないものに、価格が付くこと。

いろいろ考えてみるに、価格が、商品と貨幣の交換比率として現われている、ということがヒントになるのかも知れません。貨幣の所持者は、貨幣の直接的交換可能性を行使して、彼が手に入れたい商品と交換します。この過程が繰り返す中で、貨幣所持者は、是非手に入れたい商品に対しては価格が上昇しても貨幣を支出する、ということになってくるのかも知れません。逆のこともあるので、価格は価値以上になったり以下になったりするのでしょうか。

また、手に入れたい物に対して貨幣を支出する、ということになると、上記 2) のようなことにもなると思われれます。



「資本論を読む会」便り

No. 43
2019.2.20

今年最初の例会を1月27日に行ないました。インフルエンザの流行で参加できなかった方もおられました。2月に入って今度は麻疹が流行しているようです。健康にも十分注意して、今年も資本論を読んでいきましょう。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版。段落は本文の字下げで数える)。

◆第44回

第1巻 第3章 貨幣または商品流通

第2節に入る前にレポーターの提案で、「便り」前号の最後に編集人が書いた、

「一商品の金での価値表現…は、その商品の…価格である。」という価格の概念規定と、1) 商品の価値が不変でも価格は変動すること、2) 価値を持たないものにも価格が付くこと、の2点が整合しないように思われる、スッキリしない。

ということについて議論することになりました。

商品に価格をつけるのは人であり、恣意的な面がある。／商品の価値は事後的にしか分からず、あらかじめ価値を知る者はいない。／商品は交換されて価値が分かるが、労働時間は分からない。／価値は労働時間であるが、直接に労働時間で表すことはできない。／等々、いろいろな意見が出され議論し、編集人は次のように理解し大分スッキリしました。

- ・ 価格の概念規定は価格の本質を述べているのであり、商品生産者が価格を決定する過程を説明しているのではない。
- ・ 商品の価値は、その商品が社会的使用価値であることが実証されるまで、確定しない。
- ・ 抽象的人間労働の量は、同種商品のどれだけが社会的使用価値であるか確定するまで、確定しない。
- ・ 商品生産者は、彼の商品に価格をつけるに当たって、その価値を知らない。過去の経験とかで価格をつける。価格は交換比率として現われている。

第2節 流通手段

a 商品の変態

第2節の位置づけについて、レジュメから引用しておきます。

貨幣の価値尺度機能では、流通過程に入るべき準備として商品流通の前提である商品価格(価値表現)を考察しました。この節では、価格の実現を考察します。

「価格の実現」とは商品の販売であり、商品の流通に他なりません。二節「流通手

段」は、「a 商品の変態」「b 貨幣の流通(通流)」「c 铸貨 価値章標」から構成されており、貨幣の成立によって諸商品はどのような運動を展開するのか、この運動形態のなかで貨幣はどのような機能を果たしているのか、そしてその機能において貨幣はどんな姿態を取るのかを順に考察しています。

【第1段落】 (118) すでに見たように、諸商品の交換過程は、…

商品の発展は、交換過程に含まれる矛盾の運動を可能にする形態をつくる

商品の交換過程は、矛盾した互いに排除しあう諸関係を含んでいる。商品の発展は、この矛盾を解消しはしないが、それらの矛盾の運動を可能にするような形態をつくりだす。

これは、一般に現実の矛盾が解決される方法である。

レポーターの説明は大体次のようでした。

商品の交換過程には、商品の使用価値としての実現と、価値としての実現という、二つの契機がありますが、両者は矛盾し対立しています。

例えば、リンネル生産者が、リンネルを欲する小麦生産者と出会ったとします。この場合、リンネルの使用価値は実現しそうですが、リンネル生産者が小麦を欲しなければ交換は成立しません。つまりリンネルは価値として実現することが出来ません。

こうした事態は至る所で起き交換過程は行き詰まってしまいます。

しかし、貨幣が生み出されることによって、貨幣を媒介とした商品交換という運動が始まります。ただし、交換過程に存在している矛盾そのものが解消したわけではありません。

さて、段落後半に、矛盾が新たな運動の契機となる例として、

物体が絶えず他の物体に落下しながら同時にそれから飛び去るということは矛盾であるが、楕円がこの矛盾を実現し解決する。

と、あります。この説明は編集人がさせて頂きましたが、少しゴタゴタして分かりにくかったかも知れません。整理してみます。

- (1) まず落下。物を持ち上げて手を離せば地球(の中心)に向かって落下します。
- (2) 次に飛び去り。物を水平に投げ出せば、地球は丸いから地球から離れて行くはずですが。しかし飛び去ることはできません。遠くへ行ってやがて落下します。
- (3) そこで、投げ出す速度を十分大きくすると、落下地点までの距離が4万km(地球1周)を超えるようになるでしょう。さらに速度を大きくすると、遂に地表に落下することなく、地球の周りを回り続けるようになります。この時の軌道の形が楕円(円を含む)です。

月や人工衛星は楕円軌道を描いて、落下し続けながら飛び去り続けています。

落下することと飛び去ることは矛盾したことです、このようにして両立(つまり解決)しているという訳です。

貨幣は大発明か？ 発明か発見か？ が議論になりました。貨幣になった商品は米など、地域でいろいろあります。一定の条件を満たした商品が貨幣として使われるようになったの

ですから、発見でしょうか。鑄貨を初めて作ったのは発明でしょうか。

【第2段落】 (119) 交換過程が諸商品を、それらが非使用価値…

商品の形態変換を考察しなければならない

(1)商品交換。商品を使用価値とする手に移すことは、社会的物質代謝。
使用価値とする手に移った所から先は消費過程。

(2)商品交換の解明

→ 社会的物質代謝を媒介する諸商品の形態変換だけを考察しなければならない。

諸商品の現実の交換過程は社会的物質代謝を示しているが、ここでの課題は物質代謝(生産→交換→消費)の考察ではなく、商品交換における「諸商品の形態変換または変態」を考察することだ、と説明がありました。

段落後半に、「社会的物質代謝を媒介する諸商品の形態変換または変態だけを、考察しなければならない。」とあります。(上記要約の(2))

「物質代謝」という語は、訳本によっては「素材変換」とか「質料変換」となっているようです。「素材変換」という言い方が分かり易いという意見もありました。

因みに広辞苑では、「物質代謝(とは) 生物個体、広義には生態系における生物群が栄養物質を摂取し、これを変化して自体を構成し、または活動のエネルギー源とし、不必要な生成物を排出するなど、生物体を構成する物質の変動全般をいう。(…中略…)。物質交代。新陳代謝。」となっています。だから「社会的」の語をつけて用いられています。

【第3段落】 (119) この形態変換の理解がまったく不十分な理由は、…

商品の形態変換の理解が不十分な理由

(1)商品の形態変換の理解がまったく不十分な理由

①価値概念そのものが明らかになっていない。

②1つの商品の形態変換は、常に普通の商品と貨幣商品との交換において行われる。

(2)商品と金の交換という素材的契機だけに固執すると、形態上の変化を見落とす。

a 金はただの商品としては貨幣ではないということ

b 他の諸商品は、それらの価格において、それら自身の貨幣姿態としての金に自分自身を関係させるのだということ

を、見落とす。

今、商品Aを記号 W_A で、商品Bを W_B で、貨幣をGで表すことにします。

① 商品 W_A の生産者aの手には、最初、その商品があります。… W_A

② 次にその商品 W_A を販売し、aさんは貨幣を手に入れます。…G

③ そしてその貨幣でaさんは自分の欲しいものを買います。… W_B

と、このようにしてaさんの手の中で、商品 W_A → 貨幣G → 商品 W_B と、価値がその形を変えて行きます。商品 W_A の販売によって素材としての金を得たとしか見ないのであれば、

このような把握はできない、と言うのが、この段落の趣旨でしょう。

ところで「形態変換の理解が不十分」なのは誰なのかという質問がありました。マルクスの時代の人々、当時の経済学、という説明がレポーターからありました。

【第4段落】 (119) 商品はさしあたりは金めっきもされず、砂糖も…

商品の交換過程の現実の運動形態は、商品の対立的な形態である。

(1)交換過程は

使用価値としての商品 ⇔ 交換価値としての貨幣
という外的な対立を生み出す。

これは、商品が、その使用価値と価値との内的な対立を、表わしたものだ。

(2)他方 この対立のどちらの側も商品、つまり使用価値と価値との統一体。

しかし この差別(使用価値と価値)の統一は、両極のそれぞれに逆に表されている。
(一方では使用価値、他方では価値)

そのことによって同時に両極の相互関係を表している。

(a)商品は実在的には使用価値。

その価値存在は価格において観念的に現れているだけ。

この価格がその商品を、その実在の価値姿態としての対立する金に、関係させている。

(b)金材料は実在的には交換価値。

金材料は、ただ価値の物質化として、貨幣として、認められているだけだから。

その使用価値は、その実在の使用姿態の全範囲としての対立する諸商品にそれに関係させる一連の相対的価値諸表現において、ただ観念的に現れているだけである。

交換過程の内に、商品の価値と使用価値の対立がどのように現われているか、が、説明されています。商品内部にある価値と使用価値の対立が、外に、目に見えるように現われている(外化している)ということです。

第3・第4段落とも、モノとモノとの関係、つまり使用価値の関係を扱っているのではなく、モノ(使用価値)と価値の関係を扱っていることに注意しておく必要があるという指摘がありました。

「金の使用価値」の意味についても確認しました。

第2章交換過程の第12段落(注43の次)に、

「貨幣商品の使用価値は二重になる。それは、商品としてのその特殊な使用価値、たとえば金が虫歯の充填や奢侈品の原料などに役だつというような使用価値のほか、その独自の社会的諸機能から生じる1つの形態的使用価値をうけとるのである。」

とあります。この「独自の社会的諸機能から生じる1つの形態的使用価値」、つまりどんな商品とも交換できるという使用価値です。

※ [お願い] 次回以降、長い段落がしばしば出てきます。これまで通り一々読み上げてからレポートするのも難儀ですので、読み上げは省略したいと思います。あらかじめ目を通してからご参加下さい。

「資本論を読む会」便り

No. 44
2019.3.16

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。
段落名の後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。
原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初
めの数語を付けています(大月書店全集版。段落は本文の字下げで数える)。

◆第45回 第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第2節 流通手段 a 商品の変態

【第5段落】(119) そこで、われわれは商品所持者のだれかといっしょに… 注)65

商品の交換過程は、相対立し依存し合う2つの変態において行なわれる。

(1) 例: リンネル織職の20エシのリンネル(商品) 価格= 2£

①20エシのリンネルを、2£の貨幣と交換 商品から貨幣への転化 (変態1) W-G

②2£の貨幣を、同価格の聖書と交換 貨幣から商品への再転化 (変態2) G-W

聖書は使用価値として、リンネル織職の信仰欲望を満たす。

(2) 商品の交換過程は、相対立し、かつ互いに補いあう2つの変態 ①と② において、行わ
れる。

(3) 商品変態の諸契機は、同時に、商品所有者の諸取引でもある。

- ・販売 商品の貨幣との交換
- ・購買 貨幣の商品との交換
- ・両行為の統一 買うために売る

(注) ・ £ =ポンド・スターリング

・ W-G、G-W など、第7段落以降で使われる表式を用いた。

W: Ware(独) 商品 G: Geld(独) 貨幣

商品の交換過程には、対立し矛盾する2つの契機があります。

- 商品の使用価値としての実現
- 価値としての実現

例えば、リンネル生産者の前に、リンネルを欲する小麦生産者と現われたとすると、リンネルは使用価値であると認められたことを意味します(契機 a. クリア)。しかし、リンネル所有者が小麦を欲しなければ交換は成立しません。つまり価値として実現することが出来ません(契機 b. 失敗)。

こんなことが至る所で起きるので交換過程は行き詰まってしまうのですが、交換過程は貨幣を生み出すことによって、この矛盾の運動を可能とするような形態をつくりだします。

商品の交換過程は、要約(1)の①②のように、売りと買いという2つの契機に分離され、両行為の統一、W-G-Wすなわち買うために売るという商品変態を遂げることとなります。

ここでは交換過程の2つの契機の(a. と b.)対立が、売りと買いという形に分裂することによって、社会的物質代謝を実現しています。

諸商品の交換過程で、相対立し、補い合うものは何か、という質問がありました。

レポーターから、①価値と使用価値の対立。②次に、商品の二重化(一般の商品と貨幣への分裂)による商品と貨幣の対立。③そして、売りと買いの2つの変態の対立。が、指摘されました。①から③へと発展しています。この段落では、「対立しつつ互いに補い合う2つの変態」と言っていますから、③の売りと買いと言えるでしょう。

【第6, 7, 8段落】 (120) いま、リンネル織職が取引の最終結果を調べて…

[6] リンネル織職の取引の最終結果 リンネルは → 聖書に
最初の商品の代わりに価値は同じだが有用性の違う別の商品をもっている。

同じやり方で、彼はそのほかの生活手段や生産手段も手に入れる。

彼の立場からは、

全過程は、ただ彼の労働生産物と他人の労働生産物との交換。つまり生産物交換

[7] 商品の交換過程の形態変換 商品—貨幣—商品
W-G-W

[8] 素材的内容から見れば、この運動は W-W (商品と商品との交換)
社会的労働の物質代謝。その結果では過程そのものは消えてしまっている。

貨幣が媒介しているけれど取引の最終結果は商品と商品の交換です。

「素材的内容」の「素材」とは貨幣と商品のことであるという意見もありましたが、商品のことではないでしょうか。するとこの変態でリンネルが聖書に変わったこととなります。

では「その結果では、過程そのものは消えている」とはどういうことでしょうか。結果である聖書には、リンネル→金→聖書と変化して来た履歴は書かれていないということでしょう。

あと、第6段落では商品所有者について語っているが、第7,8段落では商品を見ている、という違いがあることが指摘されました。

関連して、現象の背後にあるものを見るとか、複雑な中にある単純なもの、具体物などにも話が及びました。

【第9段落】 (120) W-G、商品の第一変態または売り。商品から金体への…

商品の第1の変態、または、売り。

(1) 商品価値の、商品体から金体への飛び移り …… 商品の命がけの飛躍。

失敗は商品所持者にとって痛手である。

彼の生産物は、彼にとって交換価値としてのみ役だつ。(社会的分業の結果)

彼の生産物は、貨幣においてのみ一般的な社会的に認められた等価形態を受け取る。

(2) 第1の変態に関わるいろいろな問題

- ①彼の生産物が売れるためには、貨幣所持者にとっての使用価値でなければならない。つまり、商品に支出された労働は社会的分業の一環として実証されなければならない。しかし、分業は自然発生的で、個々の生産者の意志や意図とは無関係に行なわれる。そのため、
- ・商品は、新たに生まれた欲望を満足させようとする使用価値かも知れない。それへの欲望をこれから呼び起こそうとする新しい使用価値かも知れない。
 - ・生産工程の途中段階の半製品が、独立した商品として市場に登場することがあるが事情はすでに熟しているかも知れないし、熟していないかも知れない。
 - ・生産物が、今日は社会的使用価値であっても、明日もそうだとは限らない。
 - ・労働(例:リンネル織職)が、社会的分業の公認された一環であっても、リンネルに対する需要が他のリンネル生産者によって満たされることがあり得る。などの事情が生じうる。
- ②彼の生産物の使用価値が実証され、貨幣が商品によって引き寄せられるとしても、どれだけの貨幣が？ という問題が起きてくる。
答えは、すでに商品の価格によって、予想されている。
彼が自分の生産物にただ社会的に必要な平均労働時間だけを支出したとしても、リンネルの生産条件が彼の背後で激変すると、リンネルの価値は変化する。
- ③リンネルのどの一片も社会的に必要な労働時間だけを含んでいるとしても、市場は、リンネルを2シリング/1エシ という正常価格で吸収できないことがある。リンネルの総量は、余分に支出された労働時間を含んでいることがありうるから。
- 注) リンネル20エレ=2£, 1£=20シリング → リンネル20エレ=40シリング
リンネル1エレ=2シリング

商品の交換過程はW-G-Wですから、W-G、商品の第1の変態=売りから始めます。商品が売れると、

その商品が社会的使用価値であることが実証される。

価格を貨幣に実現できる → その貨幣で欲しい商品を手に入れる。

となりますが、売れなかったら商品所有者にとっては一大事です。

W-Gの変態に関わるいろいろな問題を、レポーターは大略 次の3つに整理しました。

- ①自然発生的な分業社会 → 生産物が社会的使用価値であるとは限らない。
- ②生産に必要な社会的労働量は常に変化。商品の価格は常に変化。安価な商品が出現。
- ③社会的過剰生産が起こる場合がある。

<①～③は資本論本文のどこに対応するのか。>

が、議論になりました。特に①の始めが分かりにくいです。レポーターの宿題、ということになりましたが、編集人は上記要約を作るために、次のように区切りました。

- ①「それを(他人のポケットにある貨幣を)引き出すためには、…」
- ②「しかし、かりに彼の生産物の使用価値が実証され、…」
- ③「最後に、市場にあるリンネルは、どの一片も…」

<①～③の分け方はこれで良いか。>

という疑問も出されました。議論の中で、宮川訳「資本論」の解説では4つに分けられて

いると紹介がありました。

- ① 商品に支出された労働は社会的に有用な形で支出されなければならない。
- ②a 社会的に必要な労働量が支出されなければならない。
- ②b 商品1個の生産に必要な労働の分量は変化する。
- ③ リンネルの総量が余分の労働時間を含んでいる場合。

です。しかし、この分割が良いとはならなかったと思います。

なお番号は、要約(2)の①～③の②の部分が2分されているので、このように付けました。

<「社会的必要労働時間」の2つの意味>

③を理解する上で、「社会的必要労働時間」は2つの異なる意味で使われていることに注意しなければならない、という指摘がありました。

- (a) 原著p54 で述べられている、価値量を規定する労働時間
- (b) 社会が必要とする使用価値を生産するのに必要な労働時間

例えば、20エレのリンネルを生産するには一定の労働時間が必要ですが、生産者によって長短あるでしょう。しかし、ある社会のある時代には、その技術的水準できまる平均的に必要な労働時間があります。これが(a)です。

次に、1年間に社会が必要とするリンネルの総量は、上着用に何エレ、寝具用に何エレ…、と積算して、ある数量になるでしょう。この量のリンネルを生産するのに必要な、全労働時間です。これが(b)です。

<③の理解。「過剰生産」？>

ここでは、具体的な数値例をあれこれ考えての検討もしました。(詳細は略します)

「リンネルは……社会的に必要な労働時間だけを含んでいる(のに)、……余分に支出された労働時間を含んでいる」というのは矛盾ではないかと疑問が出されました。しかし、「社会的必要労働時間」は2つの異なった意味で使われており、矛盾ではありません。

この③の内容は、資本論第3巻で扱われている市場価値に関連した内容だ、という指摘がありました。

また、②と③は同じではないか？ という疑問が出されました。特に結論は出てなかったようですが、編集人は次のように考えました。

- ②は、生産力が激変した場合、先に市場に出た商品の価値変化。
- ③は、社会的に必要な量以上に生産された場合の価値変化。

社会的に必要な量以上の使用価値の生産を、レジュメは「過剰生産」と表現しています。しかし、この用法は適切か、と疑問が出されました。

資本論辞典(p17)には、「資本主義社会に固有の現象たる<過剰生産>とは、第1に、たんなる欲望と対比しての '生産物の過剰生産' ではなく、支払能力ある需要と対比しての '商品の過剰生産' であり、…(以下略)」とあります。「生産物の過剰生産」と言えなくはないようですが、後々混乱の元となりそうなので、使わないのが上々かと思われま

「資本論を読む会」便り

No. 45
2019.4.15

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。
小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版。段落は本文の字下げで数える)。

◆第46回 第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第2節 流通手段 a 商品の変態

前回までの復習から始めました。

この第3章のテーマは、標題にあるように「貨幣または商品流通」です。人々が必要とする物質の生産は、私的に、個々バラバラに行なわれる分業です。生産物は、それを必要とする人の手に渡すために、商品となり交換されます。その交換のために貨幣が生まれ流通手段となりましたが、歴史的過程を通じて金はその地位を獲得しました。

社会はいろいろな種類の生産物を一定量必要とします。生産物の間には質的にも量的にも一定の関係が生じます。そしてこれらの条件が生産や流通を規制します。

この社会的物質代謝(生産し分配し消費する)がどのように行なわれるのか、解明されなくてはなりません。

商品の交換過程の形態変換は、 $W-G-W$ のように表されます。第9段落はこの前半、つまり $W-G$ を分析しています。

あと、今回読む第10段落は、第9段落のまとめである、物神性との関連もある、との指摘もありました。

次に、第9段落の最後の10行ほどの部分についてもう一度考えてみました。

「最後に、市場にあるリンネルは、どの一片もただ社会的に必要な労働時間だけを含んでいる …… 社会の総労働時間の大きすぎる一部分が …… 証明している。」の個所は、大体次のようなことでしょう。

どのリンネル織職も、同じ時間(社会的必要労働時間。例えば1時間)で、1エレのリンネルを生産するとする。それでも、社会的に必要な以上の分量のリンネルを生産し得る(各リンネル織職は自分の考えで生産するから)。

もし、価値通りの価格(1エレ当たり2シリング)で、生産された全リンネルを販売できなかったとすると、リンネルは社会が必要とする以上に生産されたことを意味する。

この場合について、供給が需要を上回ったのだから価格が価値以下に下がるのではないか、個々のリンネルの価値が減少するのではないかと、いろいろ議論しましたがあまりハッキリしませんでした。

前回指摘された市場価値との関連については議論しませんでした。第3巻 第2篇 第10

章 競争による一般利潤率の平均化 市場価格と市場価値 超過利潤」を理解しないと第1巻のこの段落を理解し得ない、というものではないでしょう(より深い理解に達するとしても)。

さて、上に要約した部分に続き、「結果は、それぞれのリンネル織職が自分の個人的生産物に社会的必要労働時間よりも多くの時間を支出したのと同じことである。」とありますが、これはどういうことか考えてみます。

今、仮に、

①リンネル1エレを生産するのに必要な社会的平均労働時間は1時間。

よって、2シリングの価値に相当する労働時間は1時間。

②社会が必要とするリンネルの分量を200エレ。そのためには200労働時間が必要。

③実際には総計300エレが生産された。つまり300労働時間が投入された。

とします。

社会が必要としたリンネルは200エレですから、これに300労働時間が投入されたことになります。したがって、各リンネル織職は、リンネル1エレの生産に1.5労働時間を費やしたのと同じです。社会的必要労働時間は1時間ですから、リンネル織職は無駄に労働した訳です。リンネル1エレは2シリングで販売されたように思われます。

こうして段落最後の次の文に達します。

「市場にあるすべてのリンネルが1つの取引品目としかみなされず、どの一片もその可除部分としかみなされない。そして、実際にどの1エレの価値も、ただ、同種の人間労働の社会的に規定された同じ量が物質化されたものでしかないのである。」

【第10段落】 (122) このように、商品は貨幣を恋したう。だが、「まことの恋が…

私的生産者の独立性が、全面的物的依存の体制によって補完されている。

(1) 商品の貨幣への変態は、必ずしも順調に行くわけではない。

(2) 生産の自然発生的分業は、生産量をも自然発生的・偶然的にする。

(3) 故に商品所有者たちは、次のことを発見する。

①分業が、社会的生産過程と、そこでの生産者間の関係を、生産者自身から独立なものにする。

②人々の相互の独立性が全面的な物的依存の体制で補われている。

【第11段落】 (122) 分業は、労働生産物を商品に転化させ、そうすることによって…

現象を純粹に考察するために、商品の貨幣への転化は順調に進むとする。

(1) 分業は、労働生産物を商品にし転化させ、労働生産物の貨幣への転化を必然にする。

(2) 同時に、分業は、労働生産物の貨幣への転化が成功するかどうかを偶然にする。

(3) 現象を純粹に考察するために、商品の貨幣への転化の正常な進行を前提する。

(4) 商品が売れている限り、商品の形態変換はつねに行われる。

ただし、形態変換で価値量が増減するという変則的な場合があり得る。

【第12段落】 (122) 一方の商品所持者にとっては金が彼の商品にとって代わり、…

W-G は同時に G-W でもある。

- (1) 商品と金との交換……持ち手変換
 - ・商品の交換相手は、商品の一般的価値姿態。
 - ・金の交換相手は、金の使用価値の1つの特殊な姿態。
- (2) 金が貨幣として振る舞う ← 商品の価格が商品を貨幣としての金に関連づけている。
- (3) 商品形態から貨幣形態への変態……観念上の金を現実の金に変えた瞬間に実現。
- (4) 商品価格の実現は同時に、貨幣の観念的なだけの使用価値の実現。

ここでは要するに、一つの過程が、商品所持者からは販売であり貨幣所持者からは購買であるという二面的な過程である、と言っています。

【第13段落】 (123) これまでのところでは、われわれの知っている人間の経済関係は、…

商品の第1の変態は、つねに同時に、別の商品の第2の対立的な変態。

- (1) 商品所有者たちの経済的關係においては、自分の労働生産物を手放すことによるのみ、他人の労働生産物を手に入れられる。よって、貨幣所有者は次のいずれかである。
 - a. 彼の労働生産物が貨幣形態(金)である。
 - b. 彼の労働生産物を貨幣と交換済みである。
- (2) ①金は生産源において、同じ価値の他の労働生産物と交換され、市場に入り貨幣となる
 ②生産源での金と商品との交換を別とすれば、
 金は、どの商品所有者の手の中でも、販売即ち第1の商品変態W-Gの産物である。
- (3) ①金が観念的貨幣(価値尺度)となったのは、
 全ての商品がその価値を金ではかり、金を、それらの価値姿態に、したからである。
 ②金が実在的貨幣となるのは、
 商品が、全面的譲渡によって、金を、商品の現実的価値姿態にするからである。
- (4) 商品の価値姿態 = 貨幣 を見ても、それに転化した元の商品が何かは分からない。
- (5) [リンネル織職] リンネルW — 貨幣G — 聖書W (W-Gは過程の前半)

[小麦生産者] 小麦W — 貨幣G — リンネルW (G-Wは過程の後半)

・1つの商品の第1の変態は、つねに同時に、別の商品の第2の対立的な変態。

要約(2)に関して、金生産源における金と他の労働生産物の交換は、金の販売ではなく、直接的生産物交換W-Wである、という指摘がありました。しかし「その瞬間から、金はいつでも実現された商品価格を表している。」のですから、ここで「商品市場に入り貨幣となったと理解できます。すると、金を受取った商品生産者は自分の商品を販売したことになりそうですが、議論ではあまりはつきりしませんでした。

金生産者が交換して得た商品が小麦であるとし、小麦生産者は交換で得た金をリンネルと交換したとすると、次のような図式が成立すると思われる。

[金生産者] 金W — 小麦W

[小麦生産者] 小麦W — 貨幣G — リンネルW

要約(4)の本文に「その価値姿態にあつては、商品は、…… 無差別な人間労働の様な社会的物質化に蛹化する。」とあります。この「蛹化」という例え方が面白いという話になりました。商品の変態を、昆虫の変態〈幼虫→蛹→成虫〉になぞらえています。さらに、蛹は貨幣に対応していますが、蛹は中が見えません。それがちょうど「貨幣を見ても、それに転化した商品がどんな種類のものであるかはわからない」ことと符合しています。

「蛹」は貨幣が資本へと発展していくことを暗示しているのではないか、という話もありました。が、ここではそこまで視野には入っていないと編集人は思います。

レポーターから、この段落の主要な内容は後半であり、貨幣が流通へ入る仕組みをここで言及する必要があったのだろうか？ という問題提起がありました。

この段落の主要な内容は指摘の通りで、上記要約の(5)がそれです。商品の交換過程はW-G-W という形態変換をなして行なわれますが、最初の商品Wは、その所持者の生産物です。最後のWは別の所持者の生産物です。では貨幣Gはどこから現われたのかという疑問が出てきます。これにあらかじめ答えたのが、段落の前半ではないでしょうか。

後々の課題になると思いますが、金の生産源に関するこの段落の説明は、現代ではどういう形になるのか検討する必要がありそうです。貨幣Gは現代では金そのものではないし、住友金属鉱山のような金の生産者は金を「販売」していますから。

【第14段落】 (1) G-W、商品の第二の、または最終の変態、買い。…

G-W。商品の第2の変態、すなわち購買について。

- (1) 貨幣は、他の全ての商品の一般的譲渡の産物だから、絶対的に譲渡されうる商品。
- (2) 貨幣は全ての価格を逆方向に読み、貨幣が転化しうる商品の一覧を示す。
それら商品の内に、貨幣の価値が表されている(自己を映し出す)。
- (3) 諸商品の価格は貨幣の転化能力の限界を表し、貨幣自身の量を示す。
- (4) 商品は貨幣への生成のうちに消失するから、貨幣を見ても、何が貨幣に転化したかは、わからない。
- (5) 貨幣は、一方で売られた商品を代表するが、他方で買われうる商品を代表する。

価格表を後ろから読むことについては、レジュメに次のような説明がありました。

X個のリンゴ = 金5円	・ 諸商品がそれらの価値を貨幣表現(価格) ・ この等式を逆にすると、 貨幣は全ての商品体で自分の姿を映している。
Ygのアルミ = 金5円	
Z量のA商品 = 金5円	
等々 = 金5円	

「貨幣の転化能力の限界」、「貨幣自身の量」の意味を検討しました。

上の例で言うと、5円という貨幣でリンゴをX個買えます。見方を変えればリンゴにはX個しか転化できません。「限界」とはこういう意味でしょう。そしてそれは、5円という貨幣の「量」である、ということです。

「資本論を読む会」便り

2019.5.14 No. 46

この四月に、一度にお二人の新参加者をお迎えしました。会場は少々手狭になってきましたが、議論がより一層、活発になりそうです。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版。段落は本文の字下げで数える)。

◆第47回

第1巻 第3章 貨幣または商品流通

第2節 流通手段 a 商品の変態

前回、第14段落で商品の変態 $W-G-W$ の前半 $W-G$ を考察しました。今回、後半 $G-W$ の考察に入り、その後、変態列の全体に進みます。

【第15段落】 (124) $G-W$ 、商品の第二の、または最終の変態、買い。——貨幣は、…。

一つの商品の最後の変態は、他の諸商品の最初の変態の総和をなす。

(1) $G-W$ (購買) は、同時に $W-G$ (販売) である。

$W-G-W$ (リンネル—貨幣—聖書) の最後の変態 $G-W$ は、同時に、
 $W-G-W$ (聖書—貨幣—安ウイスキー) の最初の変態 $W-G$ である。

(2) 一つの販売は、さまざまな商品の多数の購買になる。

商品生産者はある特定の生産物だけを供給し、しばしば大量に販売するが、彼は、多面的な欲求にせまられて、入手した貨幣を多数の購買に分散する。こうして、一つの商品の最後の変態は、他の諸商品の最初の変態の総和をなす。

レジュメでは、上記(2)が次のように図解されています。

$$W - G \begin{cases} \swarrow W_1 \\ \rightarrow W_2 \\ \searrow W_3 \end{cases}$$

例えば自動車メーカーは、自動車という商品を販売します(いろいろ車種はありますが)。その売上金で、鉄板、窓ガラス、タイヤ、エアバッグ、製造設備、土地や建物、さらには労働力など、多種類の商品を購入します。なお労働力商品については第4章で出てきます。

【第16段落】 (125) そこで今度は、ある商品、たとえばリンネルの総変態を…

売り手と買い手は、商品流通の内部でたえず人物を取りかえる役割である。

(1) ある商品の総変態……互いに補いあう2つの反対の運動、 $W-G$ と $G-W$ から成る。

商品のこの運動は、商品所有者の2つの相対立する経済的役割に反映し、

- 売りの当事者として売り手、買いの当事者として買い手、になる。
- (2)商品の2つの変態において、商品形態と貨幣形態とが、対立する両極に別れて同時に存在。
 ∴ 商品所有者が売り手のときは別の買い手が、買い手のときは別の売り手が、相対する。
- (3)同じ商品が2の相反する変態を次々に経過し、商品から貨幣になり、貨幣から商品になる。
 ∴ 同じ商品所持者が売り手の役割と買い手の役割とを次々に取りかえる。
 ∴ 売り手と買い手……固定した役割ではない。
 商品流通の内部で不断に人物を取りかえる。

商品の相対立する変態に応じて、商品所持者がその経済的役割を担う、ということです。社会の物質代謝は $W-G-W$ という商品変態によってなされますが、そこでは商品の売りと買いは表裏一体となっています。商品所持者の役割は、商品の運動によって規定されています。関連して、経済学批判からの引用も紹介されました(第2章 原著76ページ)。「棒砂糖」の語が出て来るあたりです。

すでに学んだ、資本論第2章第1段落の最後にある、「…、人々の経済的扮装はただ経済的諸関係の人化でしかないのであり、人々はこの経済的諸関係の担い手として互いに相対する…。」というとらえ方が重要です。

【第17段落】 (125) 一商品の総変態は、その最も単純な形態では、四つの極と…

1商品の総変態の最も単純な形態では、4つの極と3人の"登場人物"とを前提する。

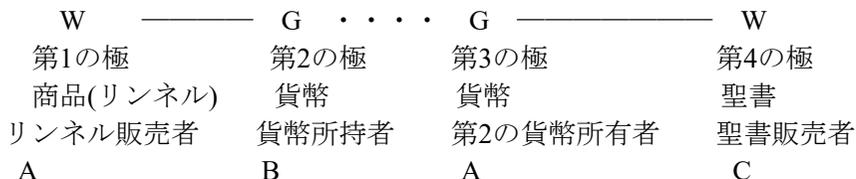
(1)第1幕 $W-G$

商品には貨幣(商品の価値姿態)が相対する。
 貨幣は、向こう側の他人のポケットの中に存在する。
 よって、商品所持者に貨幣所持者が相対する。

(2)第2幕 $G-W$

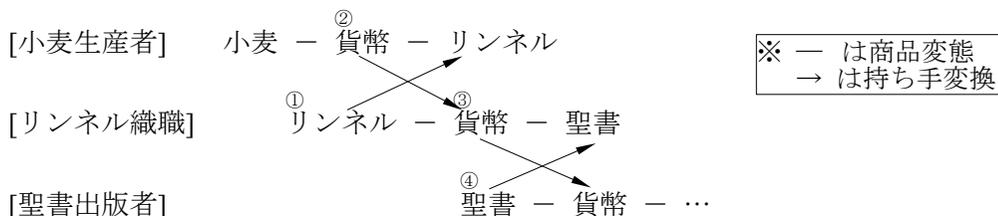
この貨幣は商品の一時的等価形態。
 この等価形態の使用価値または内容は、こちら側の他の商品体のうちに存在する。
 第1幕の売り手は買い手となり、ある第3の商品所持者が売り手として相対する。

レジュメには、河上肇「資本論入門」にある図が引用されていました。



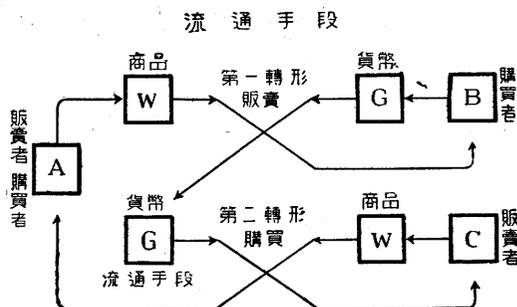
※リンネル販売者Aは、第1幕では売り手、第2幕では買い手になる。

これに対し編集人は、次のような図をホワイトボードに描いてみました。



違いは第2と第4の極ですが、議論する中で、レジュメの図が正しいと思いました。しかし、「商品にその価値姿態としての貨幣が相対するのであるが、この価値姿態は、向こう側で、他人のポケットのなかで、物的な堅い実在性を持っている。」のは、上記②です。資本論を読み返して、やはり、これが第2の極に思えてきました。③の貨幣は、リンネルが変態した後の貨幣であり、その所持者は既にリンネル織職になっています。

因みに、越村「圖解資本論」第1巻 p63 に右の図が載っていました。説明はありませんが、4つの極と3人の登場人物が表れているように見えます。



【第18段落】 (126) 商品変態の二つの逆の運動段階は、一つの循環をなしている。…

商品変態の2つの逆の運動段階は、1つの循環をなしている。

(1)変態は、商品形態—商品形態の脱ぎ捨て(貨幣)—商品形態への復帰、だから循環。

(2)ただし二つの商品は対立的。その所持者にとって、

出発点では 非使用価値

終点では 使用価値

(3)貨幣 ます、商品が転化する堅い価値結晶として現われる。(W—G—WのG)
後に、商品の単なる透過形態として融けてなくなる。(最後はW)

「循環」の語は、商品形態が2回の変態の後再び商品形態に戻ることを表しています。

段落最後の「商品の単なる等価形態として融けてなくなる。」の意味が分からないとの質問がありました。商品の単なる等価形態とは、貨幣のことです。金貨は、融かして金塊にされることがあるのを踏まえた言い方です。要するに、物を買ったらお金がなくなることで

【第19段落】 (126) ある一つの商品の循環をなしている二つの変態は、…

各商品の変態列が描く循環の総過程は商品流通として現われる。

(1) 1商品の循環をなす2つの変態は、同時に他の2商品の逆の部分変態をなしている。

(2)各商品の変態列が描く循環は、他の諸商品の循環と解きがたく絡み合っている。

リンネルの第1の変態 (リンネル2役) → リンネルの変態列を開始する。

小麦の変態列を閉じる。

リンネルの第2の変態 (貨幣の役割) → 聖書の第1の変態を終わらせる。

(3)絡み合う商品循環の全体は、商品流通として現われる。

この段落では、商品流通の概念を規定していることが重要だという指摘がありました。

段落後半に、「これに反して、生きとし生けるものの道をたどってこの商品そのものが化

してゆく金蛹としては、……。」という件がありますが分かりにくい文です。いろいろな訳を見てもあまり変わりませんが、フランス語版が分かりやすいと紹介がありました。

「リンネルの第1の変態(リンネル—貨幣)は、小麦の変態(小麦—貨幣—リンネル)の第2(=最後)の部分である。リンネルの最後の変態(貨幣—聖書)は、聖書の第1の変態(聖書—貨幣)である。各商品の変態列が形成する循環は、別の商品が形成する循環と、このように絡み合う。これらすべての循環の全体が、商品流通をなす。」(編集人訳)
要するに、文学的比喩は読みとばしても差し支えないようです。

【第20段落】 (126) 商品流通は、ただ形態的にだけでなく、実質的に…

商品流通は、形態的にだけでなく、実質的に直接的生産物交換とは異なる。

(1)例: リンネル織職はリンネルを聖書と取り替えた。

聖書の売り手は、聖書とひきかえにリンネルを手に入れてはいない。

リンネル織職も、自分のリンネルが小麦と交換されたことを知らない。

(2)商品流通によって、Bさんの商品がAさんの商品に替わる。

しかし、AとBが互いに彼らの商品を交換するのではない。

※ AとBとが互いに買い合うことも起こりうるが、商品流通の一般的な諸関係によって制約されてはいない。

(3)商品流通では、

a. 商品交換が直接的生産物交換の個人的および局地的制限を破り、
人間労働の物質代謝を発展させるのが見られる。

b. 当事者たちによっては制御されえない社会的な自然関連の一つの全体圏が発展する。

・リンネル織職がリンネルを販売できるのは、農民が小麦をすでに売っているから。

・酒好きが聖書を販売できるのは、リンネル織職がリンネルをすでに売っているから。

・ウィスキー屋が酒を販売できるのは、酒好きが聖書をすでに売っているから、等々。

レジュメでは、商品流通を次のように図解しています(少し語句を変えています)。

小麦生産者 小麦 — 貨幣 — リンネル

リンネル織職 リンネル — 貨幣 — 聖書

聖書出版者 聖書 — 貨幣 — 酒

ウィスキー屋 酒 — 貨幣 — …

「社会的な自然関連」の「自然」の意味が議論になりました。「ジネン」と読むときの意味、つまり「人の意思とは関係なく」の意味です。個々の生産者はバラバラに生産していますが、商品流通が円滑に行なわれるために、段落最後にあるような一定の関係が成立してくる、ということでしょう。

この段落で、聖書につづいてウィスキーが出てきます。イギリスではプロテスタントの聖職者が酒の製造販売していた、という話が紹介されました。

商品交換には貨幣が必要です。また、あらゆる生産物が商品として生産されていないと買うことができません。つまり、すべての生産者は商品生産者でないと困ります。

あと、資本主義の生産の無政府性とか、封建社会ではどうであったか、価値規定との関連などいろいろ議論がありました、メモが不十分なこともあり、省略します。

本文、

「商品流通では、一方では商品交換が直接的生産物交換の個人的および局地的制限を破って人間労働の物質代謝を発展させるのが見られる。他方では、当事者たちによっては制御されえない社会的な自然関連の一つの全体圏が発展してくる。」

の中の、「制御され得ない」とはどういうことかと疑問が出されました。

本文の、このあとすぐに続く、

「織職がリンネルを売ることができるのは、農民が小麦をすでに売っているからこそであり、酒好きが聖書を売ることができるのは、織職がリンネルをすでに売っているからこそであり、ウィスキー屋が蒸留酒を売ることができるのは、別の人が永遠の命の水をすでに売っているからこそである、等々。」

といった社会的な自然関連は当事者たちによってはコントロールできない、ということでしょう。例えば、リンネル生産者には、農民が小麦をいつ売るかを決められません。必ず買い手を見つけられるという手だてもありません。

【第21段落】 (126) それだから、流通過程はまた、直接的生産物交換…

流通は絶えず貨幣を発汗している。

流通過程は、直接的生産物交換のように使用価値の場所変換により終わりはしない。

貨幣は、1つの商品の変態列から脱落しても、別の商品があげた流通場所に沈殿する。

例: リンネルの総変態 リンネルー貨幣ー聖書

まずリンネルが流通から脱落し、貨幣がその場所を占め、

次には聖書が流通から脱落し、貨幣がその場所を占める。

商品は、場所変換ののち消費過程に入り流通から脱落します。それに対し、貨幣は、場所変換した先で、別の商品の場所変換を媒介する位置を占めます。こうして貨幣は常に流通過程の渦中にあり流通過程は終わらない、という訳です。

直接的生産物交換の場合は、2商品が交換されて、そこで過程は終わっていました。

この段落の役割について、「貨幣が主ではない(=流通の主役は商品)ことの伏線ではないか。」「商品の運動はW-G-WのGの段階で止まることもある。との関連で、言っているのではないか。」等の意見がありました。

「流通は絶えず貨幣を発汗している。」という例えは、運動すれば汗をかくのでそれになぞらえて、商品が運動して貨幣の汗をかくというわけです。ただし、汗は運動によって新たに作られますが、貨幣は移動しているだけです。

【第22段落】 (127) どの売りも買いであり、またその逆でもあるのだから、…

商品流通で売りと買いは必ずしも均衡しない。—— 恐慌の可能性

(1)商品流通における売りと買いは均衡するという主張は誤り。

(2)売りと買い

a) 商品所持者と貨幣所持者との相互関係としては、1つの同じ行為。W-G

b) 同じ人の行動としては、2つの対極的に対立した行為。W-G(売り)とG-W(買い)

(3)売りと買いとの同一性から、

1) 商品 買われない=売れない →むだになる。

2) 商品が買われると、長いことも短いこともある1つの休止点に達する。

・ 第1の変態 W-G は、商品の総変態の1部分だが、独立な過程である。

・ 変態の結果、売り手は貨幣を持つが、すぐ購買に使う必要はない。

(4)自分の生産物の引渡しと、他人の生産物の受取りの、直接的同一性を、
売りと買いとの対立に分裂させることによって、

流通は(直接的)生産物交換の時間的、場所的、個人的制限を破る。

(5)独立して相対する過程が一つの内的な統一をなしているのであれば、

→ これらの過程の内的な統一が外的な対立において運動する。

→ 外的な独立化が、ある点まで進めば、統一は暴力的に貫かれる。……恐慌。

(6)恐慌の可能性

1) 商品に内在する使用価値と価値との対立、

・ 私的労働が同時に直接に社会的な労働として現われなければならないという対立、

・ 特殊な具体的労働がただ同時に抽象的一般的労働としてのみ認められるという対立、

・ 物の人化と人の物化という対立

などの内在的な矛盾は、商品変態の諸対立においてその発展した運動形態を受け取る。

2) これらの形態は、恐慌の可能性を、ただ可能性だけを含んでいる。

3) 可能性の現実性への発展は、

単純な商品流通では存在しない諸関係の一大範囲を必要とする。

ジェームス・ミルやセー等は、売りと買いの同一性からそれらは均衡していると主張したそうですが、ここで商品流通の本質からこれを論駁しています。また恐慌の可能性について、それは商品流通の本質に根差すものであることを明らかにしています。むしろこちらのほうがこの段落の主要な内容かと思われます。

恐慌がここで出てくるのはなぜかという疑問が出されました。確かに、資本論の展開の中で恐慌の語が出てくるのはここが最初です。恐慌は資本主義的生産様式に特有かつ重大な現象で、資本論の展開が進んでいく中で解明されてゆきます。私たちが今読んでいる個所ではまだ資本も出てきていませんから恐慌もありません。しかし、販売と購買の対立の内に恐慌の芽(種?)があるから、商品流通の内に恐慌の根源があるから、ここで言及されているのだと思います。

なお、「資本主義に固有の恐慌というのは、すべての商品が作っても売れないという現象として現われてくる」(blog「『資本論』学習資料室」)ことです。

売りと買いの同一性とは、W-Gが成立したことだという指摘がありました。第20段落で扱われた例(1ページ参照)で言うと、リンネル織職と小麦生産者がリンネルと貨幣を交換し

たという1つの事実があるだけです。リンネル織職の側からは売りであり、小麦生産者の側からは買いです。リンネルが売られた＝リンネルが買われた、です。

さて、同一人の行動としての売りと買いは、2つの対極的に対立した行為です。このことと、売りと買いの同一性から、要約(3)の1)と2)を結論しているようですが、2)が分かりづらいです。売りと買いの同一性ということから G-W は W-G と同じだということなのかも知れません。リンネル織職の G-W は、聖書出版者の W-G ですから。つまり、W-G と G-W が商品流通の要素的運動だということでしょうか。

W-G の変態の後、リンネル織職はすぐに聖書を買わなければならないわけではありません。今持っている聖書がもう少しボロになってからでもいいのです。しかしそうなると、酒好きの聖書出版者が喉を潤すのはしばらくお預けになるかも知れません。

直接的生産物交換のさまざまな制約は、商品流通によって、交換を貨幣を媒介とした売りと買いに分裂させることによって、克服されました。商品の変態は売りに引き続く買いによって完成しますが、今見たように商品変態を一時中断させることができます。売りと買いの分裂が発展すると、元々「内的な統一をなしている」ので、ある段階で強制的に統一が回復される。と言うのが要約(5)の意味かと思います。

要約(6) 1)の①使用価値と価値の対立について、これらは商品において互いに排除しつつ前提しあう最も根本的な矛盾である。商品そのものの内にある矛盾が商品と貨幣の分裂、販売と購買の分裂へと発展した運動形態を受け取った、という説明がありました。②以下も同様だと思います。

要約(6) 3)の「一大範囲」とは資本主義的生産を意味します。資本主義社会を前提にして議論を進めていますが、単純な商品の流通は資本主義以前の社会でも見られました。しかしそこでは恐慌はありません。恐慌は資本主義社会に特有な現象だということです。

内的、対立と矛盾、などの語が出てきましたが、少し分かりにくいので調べました。

内的 他と関わりなく事物それ自身が持つ性質や属性。それ自身に起因する変化や運動。

対立 互いに他を排除すると同時に他と不可分である関係。

矛盾 現実的対立。例: 資本家と労働者。相互に依存し合って資本主義社会を形成しているが同時に両者は対立的である。

(哲学小辞典(岩波)、ヘーゲル用語事典(未来社) 調べ)

【第23段落】 (128) 商品流通の媒介者として、…

商品流通の媒介者として、貨幣は流通手段という機能をもつことになる。

わずか1行の段落で特に議論もありませんでした。



「資本論を読む会」便り

2019.9.10 No. 48

第3章第2節 b貨幣の流通 に入りました。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号(本文の字下げで数える)、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版)。

◆第49回

第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第2節 流通手段 b貨幣の流通

【第1段落】(128) 労働生産物の物質代謝がそれによって行なわれる…

商品流通が貨幣に直接与える運動形態は、貨幣の通流である。

- (1) W-G-Wは、商品として出発し、商品として同じ点に帰ってくる。…循環
- (2) 商品変態の運動は貨幣の循環を排除する。貨幣は出発点から遠ざかり復帰しない。
リンネル織職が、リンネルの変態を完成させれば(聖書を買う)、第1変態の後に手にした貨幣は、もとの所有者(リンネルの購買者=小麦生産者)の手から再び遠ざかっている。
貨幣は、新しい商品のための同じ流通過程の更新または反復によってのみ帰ってくる。
(聖書購入後リンネルを売れば...) この場合も貨幣は元の所持者から遠ざかる。
- (3) 商品流通が貨幣に直接与える運動形態……貨幣の通流 (currency, cours de la monnaie)
 - ・貨幣は絶えずその出発点から遠ざかる。
 - ・貨幣はある商品所持者から別の商品所持者に進んで行く。

a 商品の変態の簡単な復習のあと、b 貨幣の流通の第1段落に入りました。

まず、「流通」の意味が議論になりました。

全集版では、貨幣の「流通」となっていますが、別の訳では「通流」となっています。また、「^{ウムラウフ}流^{トウ}通」と原語をルビで表記しているのもあるそうです。日本語訳がゴタゴタしていますが、原語が異なるのが原因です。

<全集版>	<原語>	<別訳>	<英訳>
商品流通	Warenzirkulation	—	<u>circulation of commodities</u>
貨幣の流通	Umlauf	通流	<u>currency</u>

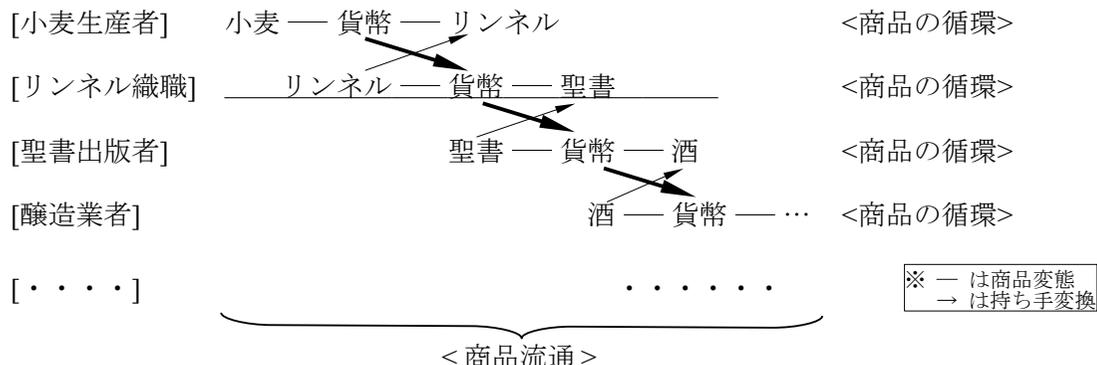
問題は意味に違いがあるかどうかです。第1段落の最後にある「貨幣の流通」の語には、(currency, cours de la monnaie)と注がついています。資本論の英語版では、標題の「流通」に英訳者注があり currency の意味が解説されています。

B. The currency⁽²⁶⁾ of money

(26) 訳注 —— この語(currency。原語 Umlauf)は、ここでは、そのもとの意味、つまり貨幣が手から手に渡る時にたどる過程または経路、という意味で使われて

おり、流通(circulation。原語 Zirkulation)とは本質的に異なる過程である。

W-G-W という商品変態は循環をなします(a 商品流通、第18段落)。リンネルは、それを生産したリンネル織職の手の中で、商品として出発して次に貨幣になりそして再び商品(ただし素材的には別の商品)となるのだから、循環、という訳です。この後、この商品は消費過程に入ります。商品の循環は相互に絡み合い、その全体が商品流通です(同、第19段落)。それを図式化すると次のようになるでしょう(レジユメの図に少し書き加えた)。



この中で、太い矢印が貨幣の「通流」を表しています。同一の貨幣が生産者の手から手へと移動しています。

用語としては、流通と通流とを使い分けるのがよさそうです。「通流」という語は国語辞典に載っているのですが、少し馴染みにくい感じがします。慣れの問題だとは思いますが。

あと、「流通 Zirkulation」には「回転」のニュアンスがあるのではないかと、といった議論にもなりました。いや、貨幣のほうこそ回転しているのではないかと、という意見もありました。でもまあ、この辺りについてはあまり拘らなくて良いかと思えます。

参考までに、商品の循環は、原語は Kreislauf、英語は circuit です。Kreis は円、Lauf は走ること・流れ・航路と言った意味です。

【第2段落】 (129) 貨幣の流通は、同じ過程の不断の単調な...

貨幣運動は商品流通の表現でしかないのに、商品流通が貨幣運動の結果であるように現象する。

- (1) 貨幣の通流は、同じ過程の不断の単調な繰返し。
 - ・ 貨幣は買い手の側にある。商品を売り手から買い手に移し、貨幣は売り手へ移動。
 - ・ 別の商品に対し同じ過程を繰り返す。
- (2) この貨幣運動が商品の2つの変態から生ずることは、見えづらい。
 - 1) 商品の第1の変態 商品自身の運動としても目に見えるが、商品の位置に貨幣が入り、商品は流通から脱落し消費される。
 - 2) 商品の第2の変態 貨幣の運動としか見えない。運動の連続性は貨幣の側にかかってくる。

商品の循環という運動

商品の2つの反対の過程(第1と第2の変態)を含む。

貨幣の固有の運動としては、第1も第2も同じ過程(貨幣と商品との場所変換)を含む。
この商品流通そのものの性質が、反対の外観を生み出す。

- (3) 別の商品による商品の取り替えは、
商品自身の形態変換によってではなく、
流通手段としての貨幣の機能によって媒介されるように見える。
貨幣が、
それ自体としては運動しない商品を、
それが非使用価値であるところの手から、それが使用価値であるところの手へと、
つねに貨幣自身の進行とは反対の方向に移して行く、流通部面から遠ざけて行く、
というように見える。

ここでは「貨幣運動の一面的形態」「商品の二面的な形態運動」の「一面的」「二面的」の意味が分かりづらかったと思います。普通「一面的」と言うと、物事のいくつかある側面の一つだけしか取り上げない、という意味で使います。ところがここはそうではなく、「貨幣運動には一つの形態しかないが、その形態」、ということです。また「二面的」については、「商品の、2段階からなっている形態運動」、ということです。レポーターが説明したように、商品の運動は $W-G-W$ と2つの変態からなっています。

「一面的な」を「一段階の」、「二面的な」を「二段階の」と読み替えると分かりやすいかも知れません。

あと、「一面的形態」の形態は、貨幣「運動の」形態ですが、「形態運動」の方は、「商品の形態」の運動(変態)です。この辺りも微妙で分かりにくいところです。

「商品の第2の変態は貨幣の運動としか見えない」について。(上記要約の(2))

この貨幣は第1の変態の結果です。例えば、リンネルを販売して得た貨幣です。リンネルの第2の変態は、この貨幣で例えば聖書を購入することですが、この場面でこの貨幣はリンネルが変態したものだということはどこにも表れません。だからリンネルの運動は見えないのだということだと思われまます。

また、「運動の連続性は貨幣の側にかかってくる」と言うのは、この第2の変態では貨幣が主導的役割をするということでしょう。もし第2の変態が行なわれなければ、商品の運動はここで中断し、商品の形態は完成しないからです。

この段落が言いたいことは、上記の要点の通りでしょう。どなたかが「貨幣が商品を動かすように見える」とまとめてくれました。「お金が全て」という風に見えて欲しいといひのであろう、という意見もありました。

【第3段落】 (130) 他方、貨幣に流通手段の機能が属するのは、…

同じ商品の2つの反対の形態変換は、反対の方向への貨幣の2度の場所変換に反映する。

- (1) 貨幣が流通手段となるのは、貨幣は商品の価値の独立化されたものだからである。
流通手段としての貨幣の運動は、実際は商品自身の形態運動でしかないので、
商品の形態運動は感覚的にも貨幣の通流に反映する。

(2) 同じ商品の2つの反対の形態変換は、反対の方向への貨幣の2度の場所変換に反映する。

①第1の変態 W-G …… リンネル織職の手に 貨幣が入る。

②第2の変態 G-W …… リンネル織職の手から 貨幣が去る。

第1段落の要約の下に掲げた、商品流通の図式を見れば、1商品の2つの形態変換に対応する貨幣の運動は明らかだと思います。

「貨幣は商品の価値の独立化されたもの」ということについては、第1章 第3節 価値形態論のところで学びました。貨幣形態は、他と区別された特定の商品が一般的等価形態を獲得した、直接的な一般的交換可能性の形態です。だから全ての商品は、自分を貨幣に変えることで、他のどんな商品にも変身できます。こういう事情で貨幣は流通手段になります。

【第4段落】 (130) これに反して、ただ一面的な商品変態、…

商品の無数の変態が絡み合っているので、同じ貨幣片が頻繁に場所変換を繰り返す。

(1) 単なる売りや買いで、同じ貨幣は一度だけ場所を替える。

貨幣の第2の場所変換は、商品の第2変態を表わす。

したがって、同じ貨幣片がひんぱんに場所変換を繰り返すのは、

商品の無数の変態がからみ合っているからである。

(2) これらのことは、ただ単純な商品流通のここで考察された形態にだけあてはまる。

段落最後の「単純な商品流通のここで考察された形態にだけあてはまる」は、第4章以降に出てくる資本の流通等はあてはまらないということだと、説明がありました。

なお、「これらのこと」とは、この段落の前半の内容だと思われます。それとも第1段落からここまでの内容でしょうか。

「貨幣の第2の場所変換」は、第3段落の最後にある「貨幣の2度の場所変換」の2番目の変換、つまり、リンネル織職の手から貨幣が去っていくことを意味します。それはリンネルの第2の変態に対応しています。貨幣は聖書に変わりましたが、聖書の側から見ると聖書は貨幣に変わったのでありこれは聖書の第1の変態です。このような商品変態の絡み合いが貨幣の場所変換を繰り返させるという訳です。

【第5段落】 (131) どの商品も、流通への第一歩で、その第一形態変換で、…

流通部面はつねにどれだけの貨幣を吸収するか、が問題となる。

第4段落までは、貨幣の通流とはどういうことか、その意味内容を検討しました。そこで今度は、商品流通内にはどれだけの分量の貨幣があるのか・必要なのか、が問題になるのでこれを検討する、ということです。

「資本論を読む会」便り

2019.10.8 No. 49

第3章第2節 b貨幣の流通 の2回目です。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということですから。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号(本文の字下げで数える)、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版)。

※ 貨幣の「流通」は、貨幣の「通流」とも訳されています。「便り」では2つが混在すると思いますのでご了解下さい。なお全集版資本論は「流通」です。

◆第50回

第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第2節 流通手段 b貨幣の流通

【第6段落】 (131) 一国では毎日多数の同時的な、したがってまた空間的に…

商品流通に必要な流通手段の総量は、商品の価格総額によって規定されている。

(1) 多数の同時的な、空間的に並存する、一段階の商品変態(販売)が行われている。

商品は、一定の想像された貨幣量(価格)に等置されている。

直接的流通形態は、商品と貨幣を、販売と購買という対極に置いて、対置させる。

∴商品流通に必要な流通手段の総量は、商品の価格総額によって規定されている。

(2) 商品の価値が不変な場合

・商品の価格総額は、金(貨幣)の価値に反比例して変動する。

・流通手段の総量は、商品の価格総額に正比例して変動する。

流通手段の総量のこの変動は、貨幣の価値尺度としての機能から生じる。

(3) 次の場合にも同じ現象が生ずる。

a 銀が金にかわって価値尺度となる場合、以前の金よりも多くの銀が流通する。

b 金が価値尺度の機能から銀を駆逐する場合、以前の銀よりも少ない金が流通する。

どちらの場合も、①貨幣材料(=価値尺度として機能する商品)の価値が変わり、

②商品価値の価格表現が変わり、

③これらの価格を実現する、流通貨幣の総量が、変わる。

(4)A 貨幣材料(金銀)は産源地において、与えられた価値をもつ商品として流通部面に入る。

この価値は、貨幣の価値尺度機能において、価格規定に際して前提されている。

B 貨幣材料の価値変動の伝播

①価値尺度そのものの価値が下がるとする。

②産源地で、商品としての金銀と直接に交換される商品の価格変動が現れる。

③他の商品は、しばらくは古い価値尺度の価値で評価される。

④商品は他の商品に対する自分の価値関係を通して、

金(or銀)価格は、価値そのものによって規定された比率で次第に調整され、

やがて、すべての商品価値が貨幣金属の新しい価値に応じて評価される。

C 調整過程④には金(or銀)の引き続き増加が伴う(金銀は産源地で流通に入るから)。

商品が、金(or銀)の低下した価値に応じて評価されるようになるに連れ、

同じ割合で、商品の価格の実現に必要な金(or銀)の量もすでに増加している。

D 新しい金銀産源地の発見に続いて生じた事実の一面的観察は(17-18c)、誤った結論、「より多くの金銀が流通手段として機能して商品価格を上昇させた」を導いた。

(5) 以下、金の価値は与えられたものとする。

議論は、ここでの貨幣は紙幣ではなく金であることを確認して始まりました。紙幣については、この節の次の項「c 铸貨 価値章標」で扱います。

「商品流通に必要な流通手段の総量は商品の価格総額によって規定される」について。

貨幣は繰返し使われるから、貨幣の流通量は商品の価格総額とは変わるのではないか？という意見がありました。ですが、貨幣を繰返し購買に使うことについては、第9段落で扱われます。この段落では同時に平行して行なわれる多数の商品変態を前提としています。なので、全商品が貨幣に変態するには、これら商品の価格総額に等しい貨幣が必要です。

また「規定される」は「等しい」という意味とは違うのではないかと、疑問が出されましたが、これは「等しい」という意味だということになりました。これもまた、この段落の前提からそう言えます。貨幣の通流回数は1回だからです。

上記要約の(2)以下は、商品の価値は変わらず貨幣の価値が変動する場合の価格総額の変動、したがってまた流通に必要な貨幣総額の変動について論じています。

ここでのポイントは、このような変動は、貨幣の価値尺度機能から生じるのであって、流通手段としての貨幣の機能からではない、ということが指摘されました。

段落後半は、貨幣の価値変化＝価値尺度の変化の伝播、商品の価格総額の「調整過程」が詳述されています。金の産源地から話が始まります。この「調整過程」で、貨幣の量が変化してゆきます。

なお、金の生産に関しては 第2巻 第2篇 第17章、第3篇 第21章 などでも扱われます。

ここまで来て、編集人は上記要約(3)を理解していないことに気づきました。aの場合で考えると、金の価値は不変で銀が新しく価値尺度となります。ここでは銀の価値は金より小さいことが暗黙の内に前提されています。そこで 1gの金=2gの銀、と仮定します。また、金1g=1円、とします。流通する商品の価格総額が100円だとすると、流通に必要な貨幣は100円、金100g です。銀が金にとって替わったとすると流通に必要な貨幣は銀200gとなり、「以前の金よりも多くの銀が流通」します。でもこれって以前と同じ100円ではないでしょうか？ 編集人は何か重大な読み違いをしているようです。

【第7段落】 (132) こういうわけで、この前提の下では、…

どの商品種類の価格も所与のものとするれば、流通に必要な貨幣総量は流通内にある商品総量によって決まる。

(1) どの商品種類の価格も与えられたものとする、

→商品の価格総額は、流通に出回っている商品総量によって決まる。

→流通に必要な貨幣総量も、流通に出回っている商品総量によって決まる。

価格総額=(商品Aの価格×商品量)+(商品Bの価格×商品量)+…+(商品Zの価格×商品量)
ですから、編集人も「あまり頭を悩まさ」ずに済みました。

【第8段落】 (132) 商品量を与えられたものとして前提すれば、…

商品総量を所与のものとするれば、流通に必要な貨幣総量は、商品の価格変動に応じて増減する。

(1) 商品総量を所与のものとするれば、商品の価格変動により価格総額が増減するので、流通する貨幣総量は、商品の価格変動に応じて、増減する。このとき、

- ・全商品の価格が同時に変動する必要はない。
- ・一定数の主要物品の価格が変動すれば、それで十分である。
- ・商品の価格変動の原因が、現実の価値変動でも、単なる市場価格の変動でも、同じ。

今度は商品価格が変動する場合です。商品総量を所与のものとして前提するならば、商品の価格総額は商品価格の変動に応じて変動しますから、流通する貨幣総量もそれに依りて変動します。

商品の価格総額変動の原因が、商品の価値変動でも、市場価格の変動でも、流通に必要な貨幣総量の変動は同じように起こる、とあります。言ってることは分かりますが、市場価格の説明がなくいささか釈然としません。市場価格の語はここで初めて出てきたのですから。

【第9段落】 (133) ある数の、無関連な、同時的な、したがって…

流通手段として機能する貨幣総量 = 商品の価格総額 / 貨幣の流通速度

(1) 1qrの小麦、20elleのリンネル、1冊の聖書、4galのウイスキー

が、互いに関連なく、同時に、空間的に並存して、販売されるとする。

各物品の価格を2£とすると価格総額は8£。流通に必要な貨幣量=8£

※ qr=クォーター elle=エレ £=ポンド・スターリング gal=ガロン

(2) 4種の商品が2£の貨幣によって継起的にそれらの価格を実現する運動

1qrの小麦—2£—20elleのリンネル

20elleのリンネル—2£—1冊の聖書

1冊の聖書—2£—4galのウイスキー

4galのウイスキー—2£

- ・2£の貨幣は、4回の流通(場所変換)をなす。
- ・この場所変換は、2つの相対立する流通段階を通しての商品の運動、変態のからみ合いを表す。
- ・これらの変態は、空間的に並存できず、時間的に継起することができるだけである。
- ・所与の時間内における同じ貨幣片の流通の回数が、貨幣流通の速度をなす。
- ・4つの商品の流通過程が1日続くとする。

実現されるべき価格総額は 8£

同じ貨幣片の1日の流通回数は 4回

流通する貨幣の総量は 2£

となる。

(3) 一般に、流通過程のある与えられた期間について、

$$\frac{\text{商品の価格総額}}{\text{同名の貨幣片の流通回数}} = \text{流通手段として機能する貨幣の総量}$$

(4) 一定期間内の、同一貨幣片の流通回数は様々である。

$$\text{個々の貨幣片の平均流通回数} = \text{貨幣流通の平均速度}$$

(5) 流通過程に投じられる貨幣総量は、同時に空間的に併存して流通する商品の価格総額によって規定される。

ある貨幣片がその流通速度を速めれば、別の貨幣片の流通速度は遅くなるか、または、流通部面から去る。

∴ 平均の流通速度が大きくなると、流通にある貨幣総量×平均流通速度 が、商品の価格総額より大きくなるから。

例 一定量の1£紙幣を流通に投げ入れれば、同量の1£金貨を引き上げることが出来る。

(1)(2)の例では、4種類の商品の価格は2£ですから、価格総額は2£×4=8£となり、同時に空間的に併存して流通する場合、8£の貨幣が必要です。

ところが、これら4種の商品の流通が継起的に4回に分けられる場合、流通に必要な貨幣量は8£/4=2£で十分、となります。

段落の最後の(5)の例について、これはどういうこと？ と質問がありましたが、紙幣が金属貨幣に取って代わることについては、次の c 铸貨 価値章標 の項で学びます。

【第10段落】 (134) 貨幣流通では一般にただ諸商品の流通過程が、…

貨幣流通の速さには、販売と購買の両過程の流動的な統一が現われる。

(1) 貨幣流通一般においては、商品の流通過程=循環だけが現れる。

(2) 貨幣流通の速さにおいては、

商品の形態変換の速さ 変態系列の連続的な絡みあい 素材変換の速さ

流通部門からの商品の急速な消滅と新しい商品による同じく急速な置きかえ

が現れる。したがって、使用姿態の価値姿態への転嫁と価値姿態の使用姿態への再転化という、相対立しつつ補いあっている販売と購買の両過程の、流動的な統一が現れる。

(3) 貨幣流通の緩慢化には、これらの過程の分離と対立的自立化が、形態変換・素材変換の停滞が、現れる。

この停滞の原因は流通自体からは分からない。流通は現象そのものを示すだけである。

日銀は流通手段の量を調整して景気回復(商品が売れるようになる)を図ろうとしている、これは段落最後の「通俗的見解」と同じだ、という意見がありました。これに対して、日銀が増加させようとしているのは流通手段ではなく貸出しであり、通貨と貨幣資本の違いがある、という指摘がありました。「異次元の金融緩和」ですから、「融資」=資金の融通=資本の貸出しのようです。資本の章へと読み進む際には、このようなことも念頭に置いておく必要があるでしょう。

なお、流通貨幣の量についての議論は「経済学批判」が分かりやすいとの事です。

「資本論を読む会」便り

2019.11.8 No. 50

第3章第2節 b貨幣の流通 を終わりました。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということですから。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号(本文の字下げで数える)、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版)。

※ 貨幣の「流通」は、貨幣の「通流」とも訳されています。「便り」では2つが混在すると思いますのでご了解下さい。なお全集版資本論は「流通」です。

◆第51回

第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第2節 流通手段 b貨幣の流通

レポーターからの提案で、新しい段落へ進む前に、「便り」前号(No.49)で編集人がよく理解できないとした問題を議論することになりました。

第6段落には、次のように書かれていました。

商品の価値が不変な場合、金(貨幣)価値が減少すると商品の価格総額が増加し、流通手段(金)総量が増加する。これと同じ現象が、銀が金にかわって価値尺度となる場合にも生じ、以前の金よりも多くの銀が流通する。

これを理解するために次のように考えました。

金1g=1円とし、1gの金=2gの銀と仮定する。さらに金銀の価値は不変だとする。流通する商品の価格総額が100円だとすると、流通に必要な貨幣は100円、金100gである。銀が金に代わって新しく価値尺度となるとすると、流通に必要な貨幣は銀200gとなり「以前の金よりも多くの銀が流通」する。

と、ここまでは良いのですが、銀200gは100円だから価格総額は増加しない?、と編集人は疑問に思ったのでした。

議論の結論は、価値尺度が変わったということは銀1gが1円になったということだから、価格総額は200円に増加する、ということでした。編集人の価値尺度概念の把握に問題があるようです。

次に、第8段落の「単なる市場価格の変動」を検討しました。「市場価格」の語は資本論ではここで初めて出てくるのですが特に説明がありません。需給変動による価格変動という理解でよいだろう、ということになりました。

【第11段落】 (135) 要するに、それぞれの期間に流通手段として…

価格の運動と流通商品量と貨幣の流通速度の関係

- (1) 一定期間に流通手段として機能する貨幣の総量は、
- ①流通している商品世界の価格総額によって、規定される。
 - ②商品の価格総額は、各種の商品の価格と、その総量に依存する。
 - ③商品世界の対立的な流通過程の流れの緩急によって、規定される。
- (2) この3要因(価格の運動、流通する商品の総量、貨幣の通流速度)は、さまざまな方向とさまざまな割合で変化しうる。
- ∴実現されるべき価格総額、それに制約される流通手段の総量は、非常に多くの組みあわせを取りうる。
- ここでは、商品価格の歴史上、最重要な組合せだけを取りあげる。

レジュメに倣って、これらの関係を簡潔に表すと、次のようになるでしょうか。

$$\text{流通手段の量} = \frac{\sum_{\text{商品種類}} (\text{商品価格} \times \text{数量})}{\text{貨幣の通流速度}}$$

ここで、 $\sum_{\text{商品種類}} (\text{商品価格} \times \text{数量})$ は、一定期間に流通する商品種類毎の(価格×数量)の総和、つまり流通している商品の価格総額を表します。

次の段落以降で、歴史上重要な流通手段の量の変動の例を取りあげるといっていますが、「歴史的に重要な例なの？」と疑問が出されました。でもまあ、そうなのでしょう。

【第12段落】 (135) 商品価格が変わらない場合には、…

商品価格が不変の時に、流通手段の量が増減するための条件

商品価格が変わらない場合

- a)流通手段の総量が増加しうるのは、
- ・流通する商品の総量が増加する時。 または、
 - ・貨幣の通流速度が減少する時。
- b)流通手段の総量が減少しうるのは、
- ・流通する商品の総量が減少する時。 または、
 - ・貨幣の通流速度が増加する時。

前段落の式で考えると、商品の価格が変わらないという条件の下で、商品の数量の増加・減少に対応して流通手段の量が増加・減少します。また、貨幣の通流速度に反比例して、流通手段の量は増加・減少します。

前段落の式を、商品種類を1種類に単純化した式、

$$\text{流通手段の量} = \frac{\text{商品価格} \times \text{数量}}{\text{貨幣の通流速度}}$$

で考えると分かり易いです。もっとも、商品が1種類では交換自体がないのですが。

なお、この段落では必ずしも必要十分条件を示しているのではないと思われます。というのは、商品の数量が減少しても、貨幣の通流速度がもっと速く減少すれば、流通手段の量は増加するからです。少なくとも式の上からはそう言えます。

【第13段落】 (136) 商品価格が一般的に上がっても、…

商品価格が一般的に上昇する時に、流通手段の量が増加しないための条件

商品価格が一般的に上昇する場合

a) 流通手段の総量が不変でありうるための条件

- ・ 流通商品価格の上昇と同じ比率で、流通商品の総量が減少する時

または、

- ・ 流通商品総量は不変で、価格上昇と同じ速さで、貨幣の通流速度が増加する時

b) 流通手段の総量が減少しうるための条件

- ・ 価格の上昇よりも速く、商品総量が減少する時

または、

- ・ 価格の上昇よりも速く、貨幣の通流速度が増加する時

これも、簡略化した式で考えると分かりやすいです。商品価格が上昇すれば流通手段の量は増加するので、それを押さえるには商品量を減らすか、貨幣の通流速度を増加させねばなりません。

次の第14段落も同様です。

【第14段落】 (136) 商品価格が一般的に下がっても、…

商品価格が一般的に低下する時に、流通手段の量が減少しないための条件

商品価格が一般的に低下する場合

a) 流通手段の総量が不変でありうるための条件

- ・ 価格の低下と同じ比率で、商品総量が増加する時

または、

- ・ 価格の低下と同じ比率で、貨幣の通流速度が低下する時

b) 流通手段の総量が増加しうるための条件

- ・ 商品価格の低下速度に比べて、商品総量がより速く増加する時

または、

- ・ 商品価格の低下速度に比べて、流通速度がより速く低下する時

【第15段落】 (136) いろいろな要因の変動が互いに相殺されて、…

様々な要因の変動は相互に相殺され、流通貨幣総額の平均水準は安定する

(1) さまざまな要因の変化は相互に相殺されうる。

そのため、要因がたえず動揺していても、

実現されるべき商品価格の総額は一定不変のままでありうる。

したがって、流通貨幣量も一定不変のままでありうる。

(2) 比較的長い期間を考察すれば、

各国で流通する貨幣総額の平均水準は、外見から予想されるより一定している。

ただし、周期的な生産恐慌や商業恐慌から生じる、または貨幣価値そのものの変動から生じる、激しい攪乱のある場合を除く。

レポーターから、現在の日銀券の発行残高も急激な変化はしていないと、報告がありました。商品価格総額は大きく変動してはいない、ということでしょう。

【第16段落】 (136) 流通手段の量は、流通する商品の価格総額と…

貨幣数量説の批判

(1)流通手段の量の法則は、

商品の価値総額と、商品の変態の平均速度が、与えられていれば、
流通する貨幣または貨幣材料の量はそれ自身の価値によって決まる。
と表現することができる。

(2)幻想、

商品価格は流通手段の総量によって、流通手段の総量はまた一国に存在する貨幣材料の
総量によって、規定される。

は、その最初の唱道者たちにあつては、

商品は価格なしに、貨幣は価値なしに、流通過程に入り、
ごたまぜの商品群の一回除部分が、山をなす金属の一回除部分と交換される。
というばかげた仮説に根ざしている。

要約(2)の「幻想」は、貨幣数量説と呼ばれているそうです。レジュメでは、この貨幣数量説に対する批判が、「経済学批判」から引用されています。

「流通速度が前提されているとすれば、流通手段の量は、簡単に商品価格によって規定される。だから、流通する貨幣が増減するから価格が騰落するのではなく、価格が騰落するから流通する貨幣が増減するのである。これは最も重要な経済法則の一つで、商品価格の歴史によって詳細にこれを証明したのは、おそらくリカード以後のイギリス経済学の唯一の功績をなすものである。」(経済学批判。全集第13巻p86上段)

【第16段落の注】 (138～)

注(78) 流通手段の量の法則(段落冒頭。第16段落要約の(1))への注

ペティ：流通手段の量は「交換の度数から、また支払いの大きさから推定できる」。

ヒューム：「物価は貨幣の量に依存する」。

スミス：「鑄貨の量は、どの国でも、それによって流通させられるべき諸商品の価値によって規制される。」(貨幣を単なる商品としているときもあるが。)

注(79) 貨幣数量説(段落中ほど。第16段落要約の(2)の「幻想」)への注

ヴァンダリント：「どの国でも、金銀が国民のあいだで増加するにつれて、物価はたしかに上がって行くであろう。したがってまた、ある国で金銀が減少すれば、すべての物価は、このような貨幣の減少に比例して下落せざるをえない。」

ヒューム、バーボン、他：流通手段の総量が価格を規定する。

注(80) 「ばかげた仮説」(段落最後。第16段落要約の(2)の後半)への注

モンテスキュー：「…一諸物の価格は、根本的には、つねに貨幣章標の総量にたいする諸物の総量の比率によって定まる」。

ロック：「人類は、金銀に創造的な価値を付与することに同意したのだから……これらの金属のうちに見られる内在的価値は、それらの量以外の何物でもない」。

「資本論を読む会」便り

2019.12.19 No. 51

第3章第2節 c 鑄貨幣 価値章標の1回目です。トントンと進むかと思いきや、議論してみると、いろいろと難しいところがありました。

※ 編集人の復習ノート。議論を踏まえて編集人はこう理解した、ということです。小見出し直後のゴシック体・丸ゴシック体は本文やレジュメの要点・要約です。原文は「資本論」を参照して下さい。参照の便宜上、段落番号(本文の字下げで数える)、原著ページ番号、初めの数語を付けています(大月書店全集版)。

◆第52回 第1巻 第3章 貨幣または商品流通 第2節 流通手段 c 鑄貨 価値章標

【第1段落】(138) 流通手段としての貨幣の機能からは、…

流通手段としての貨幣の機能から、鑄貨姿態が生ずる。

- (1) 鑄貨……流通手段としての貨幣の機能から生ずる。
- (2) 価格に現われている金重量の金片・貨幣がその商品に相対しなければならない。
- (3) 鑄造は国家の仕事 ⇒ 鑄貨は国ごとに異なる。(国内流通)
世界市場では金地金が貨幣である。

商取引の現場には価格に対応した分量の実物の貨幣(金)が必要ですが、商品流通が盛になると、分量をその都度測っていたのでは不便です(秤量貨幣)。何種類かの定まった重量の貨幣＝鑄貨をあらかじめ用意しておけば、個数を数えるだけで重量が分かり、商品流通が円滑・迅速に進みます。

日本では1897年の貨幣法により金^{ふん}2分を1円と定め、金^{もんめ}1匁の5円金貨などが作られました。1分=1/10 匁です。なお、この「分」は重量の単位なので「ふん」と読みます。

因みに、江戸時代の鑄貨「一分金」は「ぶ」と読むので紛らわしいです。この鑄貨は小判(金一両)の1/4 に値します。

要約の(3)に関連して、幕末の開港後の金流出が話題になりました。欧米と日本とで金銀比価が大きく異なることに目をつけた外国商人たちが、洋銀(メキシコドル)を日本の一分銀に替え、さらに小判や二分金などの金貨に替えて持ち出した事象です。欧米で洋銀を使って金を買うよりも多くの金を入手できたからです。

この場合、小判は鑄貨として欧米で通用しないでしょうから、そのままの形で持ち出されるときも金地金として扱われているようです。

同じく要約の(3)に関連して、国際的中継貿易港として大きく発展したアムステルダムには、たくさんの両替商がいたという話が紹介されました。いろいろな国の鑄貨が出入りするからです。「金銀が鑄貨として身につけ(ている)国家的制服」(資本論本文)という例えを使うなら、両替とは金銀の国家的制服の交換、と言ったところでしょうか。

(※手形や振替・為替の処理も行なうようになった両替商が銀行の起源だそうです。)

商品流通では価格という観念的金が実在の金(貨幣)と相対しなければならないが、その実在の金が鑄貨という姿で現われる、というのがこの段落のポイントだという指摘がありました。

【第2段落】 (139) 要するに、金鑄貨と金貨幣とは元来はただ外形…

流通鑄貨の磨滅 ⇒ 鑄貨の金重量の象徴化を引き起こした。

(1) 金鑄貨と金貨幣は外形的区別。

(2) 流通鑄貨の磨滅 ⇒ 名目金量と実質金量の乖離

⇒ 金鑄貨 度量標準から離脱

⇒ 商品の等価物ではなくなる。

(3) 18世紀までの鑄貨史……(2)の現象による混乱の歴史

(4) 鑄貨はその公称金属純分の象徴へと転化。

・磨滅鑄貨の廃貨基準の法制化は、この象徴化を法的に容認している。

レポーターから要約の(1)の例として、1匁の金と5円金貨が引き合いに出されました。この2つは金重量は等しく外形が異なるだけです。

また、(2)について、5円金貨が磨滅して例えば0.9匁になっても、流通では5円つまり金1匁として通用することだと、説明がありました。

磨滅した金貨でもその額面通りに通用することを悪用して、金貨を袋に入れてガチャガチャ鳴らして削り、削り屑を集めて金地金とする者も現れたそうです。磨滅鑄貨の廃貨基準が法制化されたのにはこういった事情があったようです。廃貨基準については経済学批判に詳しいとのこと(全集 第13巻 p91)。

日本の貨幣法(1887年～1980年)では、金貨の重量が 0.55% 減ると廃貨することになっていたことが紹介されました。じゃあ 1ポンド金貨(=ソブリン金貨)は? という話になりました。0.747 グレーン \approx 0.0648 g の減少で廃貨となっていたそうです。金貨の重量は約7.99 g なので率にすると0.8% くらいでしょうか。

なお、日本の金貨は、20円、10円、5円の3種類が、1931年の金本位制停止まで鑄造されていたそうです。

注(81)についても議論がありました。

「ロンドン塔」というのが出てくるが、全集版では造幣所となっています。これはどういうことかと質問がありましたが、鑄造所がロンドン塔にあったのでロンドン塔と言えば鑄造所あるいは造幣所を意味していたとのことでした。

ノースの引用中の「鑄造はその貨幣所有者に少しも費用をかけない……。こうして、国民はひどいめに合わされ、ろばに食わせるために藁をなう費用を支払わされた。」について議論になりました。

金地金を鑄造所に持ち込んで鑄貨にしてもらっても、商人はその費用を取られないで国民の負担になるということですが、所得税とかあったのだろうかなどの疑問が出されました。注の中にノースはチャールズ2世時代の人、とあるので17世紀中ごろ、第1次囲い込みが終わったところで、荘園領主制もすたれ、毛織物業が発展しています。この時代の税制はよく分かりませんが、農民や労働者が無税だったとは考えられません。

【第3段落】 (140) 貨幣流通そのものが鑄貨の実質純分を…

流通貨幣が鑄貨の形態を取るようになると、単なる象徴による置換へと発展する。

- (1) 金属貨幣が鑄貨の形で使われるようになると
⇒ 鑄貨は公称金属純分の象徴へと転化する
＝ 鑄貨は金属以外の材料による章標・象徴で置換される可能性を持つ
- (2) 補助鑄貨が使われるようになる
銀・銅の章標が金鑄貨の代理となりうる } 経緯は、
 - a) 微小重量の金銀鑄貨の鑄造は困難
 - b) 金の前は銀、銀の前は銅、が価値尺度であり、貨幣として流通していた。
- (3) 補助鑄貨が使われる場面
⇒ 売買が最小の規模で絶え間なく繰り返される領域 (鑄貨の磨滅が激しい)
- (4) 補助鑄貨が金の地位を奪わないために
⇒ 補助鑄貨を受取らなければならない割合が、法律で非常に低く規定された。
- (5) いろいろな種類の鑄貨が通流する経路は、互いに入り交じっている
⇒ ・ 補助鑄貨は、金鑄貨の最小額以下の支払いのために金とならんで現れる。
・ 金は、たえず小額流通に入るが、補助鑄貨との引き換えで絶えずそこから出る。

要約(1)のところの本文は、

「貨幣流通そのものが鑄貨の実質純分を名目純分から分離し、その金属定在をその機能的定在から分離するとすれば、貨幣流通は、金属貨幣がその鑄貨機能では他の材料から成っている章標または象徴によって置き換えられるという可能性を、潜在的に含んでいる。」

ですが、分かりにくい文章です。「鑄貨機能」って何だ？ という疑問も出されました。

鑄貨は、磨滅により実質純分(金属定在)が減少していても、刻印どおりの重量がある流通手段(機能的定在)として機能する(名目純分は維持される)。つまり鑄貨の金属定在と機能的定在が分離するが、この分離は貨幣流通から生じる。というのが前半です。

そうすると貨幣流通は、次のような可能性を潜在的に持っているといえる。すなわち、流通手段という機能を果たすだけなら、金属貨幣は他の材料による章標や象徴で置き換えられ得る。というのが後半でしょう。

鑄貨機能というのは、だから、鑄貨という形で実現する流通手段という機能、と言えます。鑄貨が現われることによって、貨幣流通の内に、金属貨幣が他の章標や象徴で置き換えられる可能性のあることが、ハッキリしてきた訳です。

では何故そんなことが可能なのか？ については、第8段落で説明されます。

関連して、日銀券がここで言う章標や象徴、つまり紙幣であるとして、それが代理する金貨幣が存在しないように思われるがどうしてか、という問題提起がありました。

要約(2)のa)に関して、日本では金貨は5円以上のものだけが作られ、50銭・20銭・10銭は銀、5銭は白銅(ニッケルと銅の合金)、1銭は青銅(錫と銅の合金)で作られたそうです。金5円は金1匁=3.75 g ですから、1円は金0.75 g、50銭は金0.375 g。作れたとしても取扱い不便です。

要約(4)の例として、銀貨幣は10円まで、白銅貨は5円まで、青銅貨は1円までが、受取り拒否ができない限度だったと、紹介されました。

【第4段落】 (140) 銀製や銅製の章標の金属純分は、…

最後に、無価値な紙幣が金に代わって鑄貨として機能する。

(1) 銀・銅の補助鑄貨の金属純分は、法律によって任意に規定されている。

(2) それらは流通するうちに、金鑄貨よりも急速に摩滅する。

⇒ 鑄貨機能は重量とかかわりなくなる。

⇒ 金の鑄貨定在は、その価値実体から完全に分離する。

(3) 相対的に無価値な紙券が金に代わって鑄貨(流通手段)として機能する。

紙幣では、純粋に象徴的な性格は、一見してわかるように現れている。

レポーターから、経済学批判の次の文が紹介されました。

「諸商品の交換価値がそれらの交換過程を通して金貨幣に結晶するのと同じように金貨幣は流通の中でそれ自身の象徴に昇華する。はじめは摩滅した金鑄貨の形態をとり、次には補助金属鑄貨の形態をとり、そして最後には無価値な表象の、紙券の、たんなる価値章標の形態をとって昇華するのである。」(全集第13巻、p94下段)

ちょうど、第1段落からこの段落までのまとめになっています。

現在われわれが手にする紙幣は、ここで出てきた紙幣とは異なり日銀券つまり銀行券であり信用貨幣である、という指摘がありました。

銀行が発行した債務証書が商人のあいだで流通するようになり、額面を一定金額に統一し小額化したのが銀行券です。銀行への信用を基礎に広く流通するようになりました。

現代的な問題としては、銀行券の流通を如何に理解すべきか、という事です。今学んでいる貨幣の流通とどういう関係にあるのでしょうか。資本論第3巻を学ばなければならないのですが、その第33章が「信用制度のもとでの流通手段」という標題になっています。ここにエンゲルスの注があって、「不換銀行券が一般的な流通手段になることができるのは、ただ、事実上それが国家信用によって支えられている場合だけ……」と書かれています。ですが、金本位制が廃止された現在も、この注がそのまま適用できるのでしょうか。金が貨幣でなかったら何が貨幣なのでしょう。あるいは貨幣そのものがないのでしょうか。そんなことがあり得るのでしょうか。いろいろと疑問が湧いてきます。